

バーガミニの『天皇の陰謀』、最初の上下2巻の版じゃなくて、1983年に出た新書版・全7巻の第一巻の巻頭にバーガミニが「新版への序文」というのを書いている。

このバーガミニの新版への序文は、私の判断では大変重要なんですけど、私の知る限りバーガミニの新版への序文を読んでその重要性に気がついて、ちゃんとコメントする、意見を発表するというか、注意を喚起するというか、そういう事をした人を私は誰も知りません。

多分誰もやってないんじゃないですか。

すごく重要ですよ。

バーガミニの全二巻本も今はとても手に入りにくい。

新書版は更に手に入りにくい。

この新書版は、私がよく読んだらかなり無断で削除してます、全二巻本からね。

あんまり良い本でもない、熱心に読まれないかもしれないけども、バーガミニの「新版への序文」は新書版しか載ってないです。

ほとんどまともに読まれてないんじゃないかと思う。

それでコピーして差し上げたんです。

今日は「二・二六事件の真相の全体開示」ということをお話しします。

ここにバーガミニの後編の32頁のコピーがあるでしょう。

二・二六の青年将校達の決起趣意書がそのまま載せてあります。

この決起趣意書というのは、バーガミニの本に説明してありますけど、青年将校の主な人達が自分で文章を作成したんでしょう。

それを北一輝のところへ持っていったら、北一輝が文章に手を入れて、メリハリの効く語呂にしたと書いてあります。

決起趣意書をお読みになったことありますか？

川島陸軍大臣が昭和天皇に謁見して天皇の前で決起趣意書を、青年将校はこういう趣旨で決起したようですと読み上げるわけですよ。

読み上げたら裕仁がどう考えたかという事をバーガミニが書いています。

私が決起趣意書を読み上げてみます。

これはすごく難しい字を使っていて、今の日本人にはサラサラなんて読めなくなっていると思うんです。

私も一か所読めない字があります。

辞典を引いて来ればよかったんですけど一か所は読めない字があります。

意味はわかりますけれど。

読んでみますね。

謹んで惟（おもんみ）るに我が神洲たるゆえんは、万世一系たる天皇陛下御統帥の下に、挙国一体生々化育（せいせいかいく）を遂げ、ついに八紘一字を完うするの国体に存す。この国体の尊厳秀絶は、天祖肇国神武建国より明治維新を経てますます体制を整へ、今やまさに万方向って開頭進展を遂ぐべきの秋なり。

しかるに頃來、遂に不逞凶悪の徒、簇出（そうしゅつ）して、私心我慾を恣（ほしいまま）にし、至尊絶対の尊厳を藐視（びょうし）し僭上（せんじょう）これ働き、万民の生々化育を阻害して塗炭の疾苦を呻吟（しんぎん）せしめ、したがって外侮外患（がいぶがいかん）

ん)、日を追うて激化す。

いわゆる元老、重臣、軍閥、財閥、官僚、政党等は、この国体破壊の元凶なり、ロンドン軍縮条約ならびに教育総監更迭における統帥権干犯、至尊兵馬大権の僭竊（せんせつ）を凶りたる三月事件あるいは学匪、共匪、大逆教団等の、利害あい結んで陰謀至らざるなき等は最も著しき事例にて、その滔天（とうてん）の罪悪は流血憤怒、真に譬（たと）えがたきところなり。

中岡、佐郷屋、血盟団の先駆捨身、五・一五事件の噴騰、相沢中佐の閃発となる、まことに故なきにあらず。

しかも幾度か頸血を濺ぎ来たって今なお、いささかも懺悔反省なく、しかも依然として私権自欲において・・・苟且（こうしよ）（これが分かんないんですね、苟も且つていうんですね）偷安（とうあん）を事とせり。

露支英米との間、一触即発して祖宗遺垂のこの神洲を一擲（いってき）破滅に墮せしむるは火を睹（み）るよりも明かなり。

内外真に重大危急、今にして国体破壊の不義不臣を誅戮（ちゅうりく）し、稜威をさえぎり、御維新を阻止し来れる奸賊を芟除（さんじょ）するに非ずして皇謨（こうぼ）を一空せん。

あたかも第一師団出動の大命煥発せられ、年来御維新翼賛を誓ひ殉死捨身の奉公を期し来りし帝都衛戍（えいじゅ）の我等同志は、まさに万里征途に上らんとしてしかも顧みて内の亡状に憂心転々禁ずる能はず。

君側の奸臣、軍賊を斬所（ざんじょ）して、彼の中枢を粉碎するは、我等の任として能く爲すべし。

臣子たり股肱たるの絶対道を、今にして尽くさずんば、破滅沈淪を翻すに由なし。

ここに同憂同志機を一にして蹶起し、奸賊を誅滅して大義を正し、国体の擁護開頭に肝腦をつくし、もって神洲赤子の微衷を献ぜんとす。

皇祖皇宗の神霊、ねがわくば照覧冥助を垂れたまわんことを。

っていうんですね。

ここにバーガミニが説明してます。

裕仁は黙ったままその趣意書に耳を傾けたその激烈な言葉と軍人精神の勇敢な見せかけの背後に裕仁は彼の好戦的な全政策への完全な否認を読み取ることができた。

ベールをかけた腹話的な言い方で反乱者たちは裕仁に請うてこれ以上の外征上の紛争の危険から手を引き、彼の勢力を内政改革と日本の伝統的な大和魂の保持に傾けるように求めていた、という風にバーガミニは説明しているんです。

バーガミニは、二・二六の決起趣意書と、それを裕仁が聞いてどう考えたかという事について、このように説明しているんですけど、こういう説明は、今まで日本人は全く聞いたことはないですよ。

バーガミニの評価、説明は大変妥当な、非常に当たり前の説明だと私は思うんですね。

しかし、裕仁はそういう風に考えたけど、川島陸軍大臣、本庄侍従武官長、その他陸軍の中枢将官のほとんどは、こういう青年将校の決起に完全に同調、共鳴というか同情というか支持というか、そういう風な気分だったわけですね。

そのことをバーガミニは事実即してちゃんと説明しています。

しかし、日本で今まで出版されている、公表されている、あるいはテレビ、その他等と言われている説明とは甚だしくギャップがあるわけですよ。

それで、問題がどこにあるかをまず明確に設定しないとダメですよ。

これはバーガミニの英語の巻の上巻です。

上巻と下巻があって、全一卷本というのもあります。

日本の翻訳は1973年に出た、いいだもも訳の上下二巻、約1100頁少しなりますかね。バーガミニの本は、日本語で出たものとしてはもちろん、その前の英語で出たものとしても、明治以降の日本の歴史、とりわけ大正天皇以降、大正11年に裕仁が摂政になって以降、昭和天皇が日本の国家の中樞を握ったわけです。

その昭和天皇の歴史の真相について、バーガミニの本が初めてそれを明らかに光を当てたんですよ。

この本がアメリカで出たら、凄い大ベストセラーになって色々な人が非常に高く評価した書評を書いたりしてるんです。

ところが！ これはよく熟読してくださいね。

短い文章でしょう。

83年の新版、新版というのは日本語の新書版が出るのでその序文を寄せたわけです。

驚くべきことが書いてあります。

「天皇の陰謀が物書きとしての私の経歴をお終いにしてしまった」と言ってるんですよ。

これはビックリしませんか？

非常に私はビックリしましたよ、それを初めて知って。

この本が出た1971年以来、大ベストセラーになったんです。

良く調べると、なんとこのバーガミニという人はアメリカの大学を出た後、ローズ奨学生になってオックスフォードに入学してます。

ローズ奨学生のオックスフォード卒業生ですよ。

これは欧米ではとてつもないエリートです。

インサイダーの候補です。

そういう人が、自分は日本に非常に縁が深いので昭和天皇の歴史を中心とした日本史を書いてみようという訳で、アメリカの有力な権力層から日本の多くのインサイダーへの紹介状を貰って、インタビューしたりして、本もたくさん買って、京都に住んで、京都の学生・卒業生とかを助手にして、非常に詳しい調査をして、日本のインサイダー、元将軍、元なんとかという人たちのインタビューをしたりして書いた本ですよ。

これは凄い本だということで前途洋々かと思うと、とんでもない。

この本を出したおかげで、自分の物書きとしての経歴がおしまいになったって言ってるんです。

内輪に見積もっても200万～500万ドル。

今のドルではなくて1970年代だからもう少し価値があったんじゃないでしょうか。

200万～500万ドルが、私を押さえつけておく賄賂ないしは監視料として使われたって言うんですよ。

奇妙奇天烈な話じゃないですか？

いかなる手段によるにせよ、その勘定、つまりお金は日本政府からは出ていないって言う

んです。

じゃあ誰がそのお金を出したんですか？

「とりわけエドウィン・O・ライシャワーが、私を押しつぶす大きな蠅叩きを作るために手を貸した」って言うんですよ。

ライシャワーは、気の赴くままに合衆国の大学に与える贈り物を持っていたし、日本での訓練期間中に彼に借りを作った CIA の手の者達の中核の献身を受けていたって言うんです。

つまり、ライシャワーを中心とする、アメリカのまさしく権力エリートが、バーガーミニを著述家として葬り去るために全力を尽くしたわけです。

賄賂ないし監視料というのは、バーガーミニの著述家としての活動の全てに渡って完全に抹殺するように米国の権力が総力を挙げて襲いかかったんですよ。

奇妙奇天烈な話じゃあないですか？本を5冊書いたけどね、出版社に持って行くと、かさずその出版社に手がまわって、その賄賂ってわけで、これだけ金をやるからバーガーミニの本は出すな、どうのこうのって訳ですよ。

アメリカの日本問題専門家は全部ライシャワーの息がかかってますからね。

ライシャワーが命令して「あいつはもう一切相手にするな」って言うわけです。

そんな風にして、彼はあつという間に物書きから転落していくわけですよ。

そうしてね、いまの私はマイクロコンピューターを売ったり、コンピューターのプログラムを作ったりすることで身を立てておりますって言うことになっちゃった。

そして、彼は「私の愛国心は幻滅に帰した」、つまり、アメリカは自分の祖国と思っていたがとんでもない、自分が1冊の本を書いたが為に、アメリカという国家は自分に襲いかかって、自分を叩き潰そうと、もう叩き潰してしまった。

愛国心ってのものは無くなったと、そう言ってますよ。

これは実に驚くべき序文ですよ。

バーガーミニの本は、日本の天皇を中心とする体制にとっては、絶対あってはならない本だと考えるのは当然ですよ。

ところが、日本ではなく、アメリカの国家権力そのものが、バーガーミニに襲いかかった。それはこの本が、米国つまりイルミナティにとって虎の尾を踏んだ、絶対隠蔽すべきタブー、隠蔽すべき秘密を、バーガーミニが白日の下にさらけ出してしまう。

そういう悪い事をした、犯罪を犯したという評価ではないかと。

従って、そういう扱いを彼は受けるわけですよ。

いいだもさんが翻訳者ですけど、いいだもさんがね、このバーガーミニの新版の序文を高く評価して、何かコメントしたかどうか、私は調べてないけど、少なくとも私は知りませんよ。

それで、アイリス・チャンという人が、すごく悪名をつけられてしまった **THE RAPE OF NANKING** という本、アメリカで出たら日本の天皇教狂信者達が一斉に襲いかかって、あれはとてつもない出鱈目だインチキだ悪書だって言ってすごく悪評が充満して、一般の日本人はそういう悪評だけ耳に入っていて、本物の本は全く知らないっていうことが続いて、最近10年後に日本語訳が出ましたね。

その日本語訳を読んだら、そのバーガーミニの本がいろいろ引用されてます。

しかし、アイリス・チャンも、アメリカでも高名な偉い学者達はみんな、バーガーミニの本を否定してるっていう風に言ってるんです。

だから、普通の人は理解不可能です。

何故そうなるのか？ 日本の天皇教信者と日本の国家権力とその他、それに類する御用作者・御用学者・その他が、バーガーミニを否定するのは当然でしょう。

しかし、なんでアメリカの権力がバーガーミニを葬り去ろうとするのですか。

この本は全くのインチキだって否定するんですか。

それはまさしく、昭和天皇が単に日本の存在であるだけではなくて、イルミナティ、サタニスト世界権力によって育成された、極めて有能な重要な貴重な傀儡である、イルミナティ、サタニスト世界権力の道具として裕仁は機能したし、ずっとこの本が出た当時もそうだし、今に至るまでそうである、ということの明確な証拠であると私は思います。

そう評価することで、バーガーミニの本の重要性和、今それを再評価して日本人がちゃんと勉強する、消化することを始めるべき緊急な必要性があることが証明されると思います。裕仁は別のことを考えていたそれで、私が読み上げた「蹶起趣意書」については、侍従武官長も、陸軍大将も、他の軍事参議官（まだ予備役になっていない現役の陸軍大将の全部か一部が天皇の軍事顧問の役割を果たすよう設定された職務。

軍事参議官会議とは昭和天皇の諮問に答える）も、将官クラスも、ごく少数の非常に突拍子もないへんてこりんな軍人以外の、当時の日本の軍人・将校のほとんどが、この蹶起趣意書にすごく共感したわけです。

当時の日本の人口の6～7割は農民ですけど、その農民は、第一次大戦後の軍が入ってきて、それから昭和4年(1929年)の世界経済大恐慌の前後からずっと続いている、日本の経済恐慌の結果、農村は生きることも、死ぬこともできない様な塗炭の苦しみを味わってるわけですよ。

兵隊はそういうところから出てくるんですから、将校はそれをひしひしと感じてるわけですよ。

だから、多かれ少なかれ趣意書に書かれていることは、天皇の重臣などを殺したというのは、私利私欲、私的目的の為ではなく、こういう趣旨を掲げて、何とか変えてもらいたいと決起した志を酌むべきではないか、少なくとも天皇はその志を酌んで名誉を与えてもらいたいというのが、当時の（海軍は別ですけど）陸軍の首脳層のほぼ全員一致の考えです。それでも、裕仁は全然問題にしないわけです。

全然別の考えなんです。

バーガミニは、二・二六が起きた後、裕仁は単身、厳密に言えば一人じゃないですね、裕仁のそばにいた木戸幸一は、そのころ内大臣府秘書官長だった。

二・二六で内大臣の斎藤実が殺されたでしょう。

そのあと（1940年から）木戸幸一が内大臣になった。

しかし木戸幸一1人じゃない。

裕仁（昭和天皇）の摂政時代から、「十一会」という私的な結社を主宰してるんですよ、昭和天皇の顧問団。

しかし、バーガーミニは、昭和天皇は単独で自分の考えを強行突破して、あらゆる反対、異論を押し潰して、いくつもの政治決戦に最終的に勝利したと評価してます。

それは全く正当な評価です。

日本人は、そんな話はいまだかつて聞いたことがないですからね。

だからね、それは非常に衝撃的な評価ですけど、バーガミニの本を最初から読んでいくと、当然そうなるわかる。

薩摩と長州の宮中掌握二・二六事件の当事者、関係者をあげていくと 11 項目ぐらいになる。

決起趣意書については先程お話ししました。

二・二六事件の主役として、表面に出てくるのは 4 つの勢力なんです。

昭和天皇、陸軍の北進派、陸軍の南進派、決起青年将校団の 4 つです。

しかし現象面として挙げていくと、そう言えるという事であって、その現象では物事の本質は見えてこない。

本質は何か、さかのぼって突き詰めていくと、落合莞爾さんが吉藺（よしぞの）周蔵〔上原勇作陸軍元帥の私の特務をしていた人物〕の手記について、今ニューリーダーに連載していることの画期的な意味、今まで日本人が全く知らされていない、気がついていない、極めて重要な根源的な近代日本の状況を知る為の要素があります。

私も落合さんの連載を読んでいて気がついたんですけど、そもそも孝明天皇を弑逆（暗殺）した主役が長州なんです。

公家の一部（岩倉、三条など）が共同謀議して実行したんでしょう。

ところが、薩摩が長州と共同歩調をとらないと、それはうまくいかないですよ。

薩摩が孝明天皇を弑逆して大室寅之祐を天皇にすり替えて、イルミナティの傀儡として全く偽者の天皇をでっちあげて、それを本物の天皇として日本人に見せかけて、日本人をずっと騙して、その真相を絶対に秘密にする、そういうシステムを作る上に、薩摩と長州がその二つの主役だった事を私は既に色々なところで言ってます。

しかし薩摩は西郷隆盛が主たる人物。

西郷隆盛は、イルミナティのコントロール下で彼らの傀儡となって日本を支配するというような生き方には、究極的に NO と言ったんです。

NO と言ったのでフリーメーソンがイルミナティに西郷隆盛の排除を命令したんです。

長州と薩摩も彼らの傀儡に対して。

それが西南戦争です。

西郷さんと一緒に薩摩の武士の約半分は殺されました。

残った半分はどうなったかという、そのすぐ後に大久保も殺されて、その為に、薩摩の力が弱くなって長州のひとり天下のように思われるわけです。

ところが、実はそうでもないんですね。

その事を落合さんがずっと調べていって、重要な事実を発見しました。

薩摩は英国と戦争をやって、長州は 4 カ国と戦争をやって、敗北したら掌を返すようにイルミナティの家来になるわけですよ。

薩摩も長州も。

そして薩摩藩は有能な青年武士をフリーメーソンのグラバーの手引きで英国に留学させた。

長州ファイブと英国では言うようですが、その中の一人が伊藤博文です。

それから井上（馨）。

伊藤と井上は明治時代ずっとペアで日本を支配する。

その他、その長州ファイブが、フリーメイソンと、フリーメーソンを上回る直系の長州政権内の決定的なワンワールドの支持の元に動く。

これについては加治将一という人の本に割と詳しく書いてある。

ところが薩摩も長州とほとんど同時に何人かの青年武士をロンドンに留学させている。

そのほうもワンワールド・フリーメーソンに会っただろうと加治って人も言ってますしかし、落合って言う人が言うのには、西郷軍（西郷さんの陣営）が完全に潰された後、薩摩は長州に対して弱体化したかということ、そうではないんですね。

西郷、大久保、吉井友実〔よしい・ともざね、1828～1891年・西郷、大久保と同等クラスで、薩摩藩のナンバー3・フランスに留学してワンワールド・フリーメイソンに加入し、明治初期から宮中に入っていた。

西郷、大久保なき後、ワンワールドの代理人として宮中を掌握〕の3人が主要な指導的人物と言われていて、その吉井というのが明治になって留学して、フリーメーソンに加盟したと落合さんは言ってる。

陸軍に入るけど留学して、そして宮中に入る。

つまり、ワンワールド・フリーメーソンは、宮中を完全に掌握する事を、重要な政治課題として設定したと私は思います。

それから、松方正義〔まつかた・まさよし、1835～1924年・薩摩藩・金融を掌握〕は有名な財政家・金融家ですけど、これもワンワールドで、ロスチャイルド直系の子分だと言ってます。

従って薩摩はワンワールドを通じて西郷さん一派が完全に消えた後も金融を押さえ、宮中を押さえる。

そういう風にしてワンワールドは長州の陸軍、薩摩の金融・宮中の勢力が二本立て、両建てで日本をコントロールしたと、私が要約するとなります。

これは私は気がつかなかった。

その後、高島鞆之助〔たかしま・とものすけ、1844～1916年〕という長州（薩摩の言い間違い）の有望というか有能な武士が、陸軍中將になるけど、やはり宮中に入るんです。

高島鞆之助もヨーロッパに留学してフリーメーソンに加盟したと言うんです。

薩摩の吉井と高島が、普通の歴史には全く出てこないけど、長州の陸軍、官僚と並んで同時にワンワールド、フリーメーソンの日本支配の極めて重要な陣営として機能してる、という事なんです。

私がここで何を言いたいかというと、大室寅之祐をすり替えて天皇にはした。

当然、京都で継続してきた日本の朝廷、天皇の系統とはまるで別物ですけど、別物であるにも関わらず、継続した天皇家の正統であると日本人に思わせないとはいけません。

これは非常に難しい仕事ですよ。

代々ずっと続いた天皇の正統な継承者であるというふうに日本国民に思わせるように、パフォーマンスとか、フリとか、演技とか、そういう風に作ると同時に、裏のほうでは国民に全く知られないところで宮中はワンワールドの司令通り忠実に動くように演出しなければならない。

これは途轍もない難しい仕事ですよ。

そういう場に際したのが、吉井と高島・薩摩の非常に有力な武士団の実力者です。

という事を、上原勇作〔うへはら・ゆうさく、1856～1933年・薩摩藩・山縣有朋と同時代の陸軍大将・吉井、高島のひいきで出世・やはりワンワールド〕を調べていた落合莞爾が気がついたという訳なんですね。

そういう風に見ると今問題になってる事が凄くよく解る。

そうして宮中を握るでしょう。

そうすると出てきた現象はどうなるかということ、皇族の男子は全員原則として軍人になるべしというような規則にするんです。

軍というのは、陸軍か海軍かのどちらか。

従ってバーガミニは、明治、大正、昭和と皇族の表をずっと作って、追って行くわけです。

驚いた事に日本には皇族がどうなっているかについて詳しい情報は全くない。

変な話だが、わざとそうしてる。

そこを調べて行くと、皇族の男子の軍人というのが、陸軍軍人、海軍軍人、ものすごくたくさんいる。

そんな事は孝明天皇までの日本の天皇の伝統には存在しないです。

明治天皇がそんな事を考え出して、こういう風にしようなんて事はあり得ない。

ワンワールドの司令を受けた宮中を完全に支配する力を得た、吉井、高島、そういう薩摩の藩閥勢力によって宮中がそういう風に作り変えられていった訳ですよ。

陸軍軍人、海軍軍人らの皇族は、当然の事ながら英国、フランス、プロシア（ドイツ）、その他ヨーロッパの王室、陸軍・海軍の軍人のシステムをそっくり同じ様なものを作るわけですよ。

大正天皇のクーデタ 大正天皇が明治 11 年に生まれ、昭和天皇が明治 35 年（1901 年）に生まれ、教育を受ける頃には、宮中のワンワールド支配が濃密に丹念に入念に準備されていたわけです。

その結果、どういう現象が起きたか。

大正天皇が 32 歳で天皇に即位する。

その時にバーガミニは大正天皇の失敗・未発に終わったクーデタについて書いてます。

それはこの本の第 2 巻で、いいだもも訳には省略されてる部分。

いいだももの要訳では、昭和天皇の時代は昭和 3、4 年ぐらいから始まる。

それまで大正天皇の時代、摂政になる時代、昭和天皇が即位して最初の 2,3 年。

この時代の記述はいいだももの訳には省略されてる。

ところが重要な事がたくさん書いてあり、それを追って行かないと話が結びつかないのに、カットされてます。

大正天皇の不発のクーデタなんて、私は日本人の書いたものでは読んだことがない。

クーデタとは何を意味するか？

山縣有朋は当時の元老です。

大正天皇の時代の元老では、西園寺公望、山縣有朋、大隈重信、主要なのはその 3 人ぐらいです。

大正天皇が山縣有朋と衝突するというんです。

衝突って何を意味するかというと、西洋式のナポレオンとかアレキサンドル大王とかいった人物が大正天皇の理想像になったと言うんです。

つまり、大正天皇はそういうふうには日本を、国家を、改造する気なんですよ。

明治憲法によって作られた議会制度は余計だっていうわけですよ、大正天皇は。

そんなものは廃止して天皇の絶対独裁の国家体制にしたいって大正天皇は考えた訳です。

それがクーデタです。

明治憲法（大日本帝国憲法）の議会で予算が審議されるでしょ。

議会在予算を否決すると困っちゃうんです。

政治的な焦点は、予算について言えば、日露戦争やって日本は莫大な外債（借金）を背負ってヒーヒーするわけですよ。

それで国力を養わなくちゃならないというのが国民、政治家の大多数の意見だけど、しかし、それとは全然逆の方向、つまり日本を西洋をモデルとした帝国として建設に向かって急速に前進すべきだ、その為には陸軍と海軍を増強しなければならない、そして、それに反対する議会ってのは邪魔な奴だ。

こんなものは蹴散らかして天皇絶対の国家体制にすべしと大正天皇は考え、それが大正天皇のクーデタだというのです。

山縣有朋は、そんな とんでもない事を言うなという訳です。

大正天皇に。

山縣有朋と大正天皇が正面衝突しかかり、その時点では山縣と長州閥の勢力が圧倒的に強いから、大正天皇は押さえつけられて未発に終わったと書いてある。

こんなことは私は日本人が書いたこれまでの歴史で読んだことがないです。

そして、裕仁は大正天皇の不発に終わったクーデタを諦めないで実行しようとする訳です。

それが要するに基本なんです。

立花隆が『天皇と東大』という本を書いたでしょ。

文芸春秋に連載して、いろいろ補足して厚い本を出した。

東京帝大の憲法学の教授が二人いて、その一人の上杉慎吉は議회를撲滅せよと言うんですよ。

上杉憲法学の根本的なアジェンダは「議会なんていうのは天皇を神聖化する日本の国体に全く反するものだから議会を一刻も早く撲滅せよ」というもの。

そこから右翼的な組織が出来たりどうのこうのと立花さんは説明してますけど、それは現象を言ってるだけであって、上杉っていう学者の話じゃありませんよ。

もっと根の深い話で、大正天皇が傀儡として議会は邪魔だって言い始めたんですから。

邪魔だっていうのは、大正デモクラシーの時代にはとんでもないアナクロニズムで、問題外だと多くの人が思ったかもしれないけど、ところがそうはならないですよ。

昭和になってクーデタ、暗殺、その他、諸々わっと出てきて、二・二六を昭和天皇が完全に圧殺・抹殺した後は、文字通り議会は消えて、お前ら消えて無くなれってふうになって、大政翼賛会でね、陸軍にちょっとでも逆らうような政治家は暴力的に黙らせるというふうには、実現してしまう。

イルミナティのワンワールドの意思が働かなければ、日本の純粋な国内の状況で、そんな現象は起きないですよ。

ザビエル以来の日本全滅計画しかしそういう事が何故要求されるのか？

私の『ユダヤの日本侵略 450 年の秘密』という本に書いてますが、ザビエルが日本に来て「日本はこの地上から抹殺されるべきだ」「日本人はこの地上で生きていてはならない民族だ」「これは我々にとって極めて危険な強力な敵になる可能性があるから一刻も早く一人残らず皆殺しだ」と、ザビエルはイルミナティ本部に申告しているんです。

450 年あまり、イルミナティの対日アジェンダはずっと継続してます。

家康が鎖国をして次にペリーがやってきたでしょ。

ペリーがやってきたら、日本の内部から崩れて、孝明天皇が殺されて日本は既に仮死状態ですよ。

神経麻痺してます。

ゾンビ人間みたいなものですね。

その後に来た日本の天皇を中心とする支配階級はイルミナティの檻の中に入っている実験動物のネズミのようなものです。

孝明天皇弑逆事件以降、主体的な意志を持つことは許されていないんです。

しかし、彼らが日本を完全に抹殺するには日本の独自の軍隊を完全に破壊しないとだめです。

独自の武力を破壊して日本全土をイルミナティの軍隊が占領しないと、話は先に進まないです。

それはなかなか難しいです。

米国は太平洋の遥か向こうにいるでしょ、英国に至っては太平洋どころか延々と日本にやって来て英国が日本を占領する大軍隊を日本に派遣するなんてことは夢物語にもならないです。

したがって英国は別のエージェントを使って日本を占領させないとだめでしょう。

英国を本部とするイルミナティは、あれこれ謀略の限りを尽くしているわけですよ。

ペリーが来て日本はイルミナティの資本主義のルールの中に取り込まれた。

それだけでは話は全然進まないですから、日本全土を占領して日本の陸軍も海軍も一兵も残さず一掃する、消してしまう。

話は簡単だけど実行するのは難しいですよ。

その為には日本を扇動して、西洋式の帝国主義になる、成り上がるという気持ちを起こさせ、その為に強大な軍隊が必要、陸軍も海軍も強くしなければということにしないといけない。

そんな事をするとなりの日本人は汲々として生きていられないような状況になります。

当然ながら一般は日本人はそんな事は嫌だと言うでしょう。

そんな事はヤダよと言わせないようにしないとイケませんよ。

そもそも議会というのが邪魔だとなります。

陸軍でも海軍でも良識的な優れた軍人はね、負けるに決まっている戦争はやらないです。

そんな戦争はやるな、自分は反対だというでしょう。

そういう反対する良識的な軍人は全部抹殺しないとイケません。

そしてイルミナティの命令どおり、最終的に日本は満州を占領して、中国全土を占領して、東南アジアも占領して、英国と戦争して、アメリカとも全面戦争して、ソ連とも全面戦争

してと、そういうふうにするアジェンダというか、そういう軌跡というか、そういう方向に日本を突き進めないとだめですよ。

普通の日本人、日本の指導者でも政治家でも官僚でも陸軍の軍人でも海軍の軍人でも、多少でもまともな良識持っていれば、そんな事は自分は反対だって言うでしょうよ。

そんな事やったら日本が全滅するのは子供だってわかる道理ですから、反対だって言いますよ。

だがそんな事でイルミナティは諦めない。

そこを何とかして謀略の限りを尽くし、良識的な官僚、政治家、知識人、陸軍軍人、海軍軍人を、みな追放して、イルミナティの挑発、プロパガンダ、謀略にほいほい乗ってくれるアホを日本のトップにして、全世界を敵にして百戦百敗の戦争に突っ込むようにもっていかないといけない。

そんな事は普通の国家体制では出来ませんよ。

ほとんど全国民が嫌がることをやらせるには仕掛けが必要です。

その仕掛けが絶対主義的天皇制度だった。

天皇とは天照大御神から直系した現人神であり、日本の精神をすべて支配し、権力をすべて支配し、天皇の為に死ぬ事が最高の名誉であって、天皇に一言でも批判したり何か言うだけで特高警察がやって来て撃ち殺されても当然だという具合に日本の空気を持っていかないといけません。

そういう仕掛けが二・二六の後、日本に完成したんですよ。

そういうふうにならなければ見ないといけません。

二・二六までは陸軍の将官の圧倒的多数は中国との戦争には反対です。

当たり前です。

最終的に日本はずるずる中国大陸に引きずり込まれて、昭和 20 年敗戦の時には、日本の陸軍は約 100 万人の軍を中国全土に占領軍として派遣した。

100 万の軍隊というのは口で言うのは簡単だけど途轍もない事ですよ。

しかも、100 万の陸軍の兵隊を中国戦線で維持しながら、さらに英国（英国がアジアに向ける国力は少しだが）と、モロに国力の半分を日本に向けるアメリカと、そういう戦争に向かって突入していく。

気が狂ってなければこんな事はしません。

普通の日本人であればこんな事はしません。

しかしそれに反対すると天皇が出てくる訳です。

天皇の命令に反すると直ちに死を意味する。

殺されて何も言えないって具合になる。

そういう仕掛けが完成したのが二・二六の後です。

二・二六、そして日支事変があって、その後どんどん戦争が拡大していくでしょ。

それで予定通り日本は敗戦してイルミナティが日本全土を占領したんです。

今に至るまで占領体制下にあります。

占領してしまえば、日本は完全に籠の中の鳥、檻の中のネズミとして彼らがどうするのも自由自在。

そうなるでしょ。

根本的な当事者は裕仁だ。

日本人には今に至るまでその歴史が一向に釈然としない。

釈然としないから二・二六について非常に多くの人がいろんなことをあれこれ言うけどね、しかし一向に問題の真相、本丸に迫らないんですよ。

鳥居氏という人が『近衛文麿、黙して死す』という本を一昨年出しています。

近衛文麿と木戸幸一が元宮中の中枢に近い二人の人物でしょ。

近衛文麿は陸軍の一部（統制派）による中国に対する全面戦争には全く反対したんです。

一方、木戸幸一は統制派の陸軍とともに陸軍による中国全土占領政策に舵を切るんです。

にもかかわらず、大東亜戦争、東京裁判のあと、日本では近衛が悪玉で木戸が善玉になっている。

非常におかしい。

全くおかしい世論操作が行われているんじゃないかと、この人（鳥居氏）は言った。

二・二六についても決起青年将校の趣旨が若干でも日本の国家に取り入れられれば、その後、日支事変、中国に対する戦争も開始しないし、その後の全面的な戦争とは全然別の路線を日本はとったはずだけど、その時点で昭和天皇に対して方針・政策を提案する決定的な立場にあった木戸幸一は、二・二六に対して即時徹底的に鎮圧すべきという方針を提起して、昭和天皇はすぐにそれに賛成して、そういうふうに進んでしまったっていうわけで、衛は全く別の方針だったけれど、近衛は全く排除されたという風なことを言ってます。

だから木戸は二・二六の後の方針についても、それから日本が米国との戦争を回避するかという議論でも、近衛は全く反対したんですね。

近衛は、日本は中国から陸軍を全面的に撤兵して、米国と交渉し直して、米国と戦争しないような方向に持っていくべきだと言ったけれども、木戸は陸軍中枢部の線に沿って、中国からの撤兵反対、アメリカとの戦争辞さず、そして実際にアメリカとの戦争というふうにして持っていった主犯であるこの人は言っている。

しかし日本人は、今更そういうことを言われても全然ピンと来ない。

というか、今更そんなことを言ってもしょうがないんじゃないかということになって終わりになっちゃうわけです。

木戸幸一じゃなくて根本的な当事者は昭和天皇なんです。

鳥居氏って人はそのことには触れることはできない、そのことに触れるとそれはたちまち現代日本の体制を支配している絶対的なタブーと衝突して、自分の方がぺっちゃんこになるかもしれない、だからそういうことはしないというわけです。

従って今まで昭和天皇を弾劾する、昭和天皇の政策を告発する、それを否定する、昭和天皇が反日本的な方針を強行したということについては一言も言えない、そういう呪縛が日本人を縛り続けているんですね。

どの識者にもイルミナティ（英・米・露という国家の枠を超えた存在、自由主義・共産主義という思想の枠を超えた存在）が見えていないバーガミニは、昭和初年以降の、満州事変以降の日本の戦争の主犯は、その主たる決定者は昭和天皇だという説を立てて、論証していく。

だから昭和天皇の陰謀ってわけだ。

日本ではいかなる実力者もいかなる人間も政治家も軍人も官僚も、昭和天皇の意思に異

議を唱えることはできない。

満州事変以降、日本の戦争期間中に総理大臣がたくさん替わっているでしょう。

一年か二年ぐらい、ひょっとすると一年未満で辞めたりして、非常にたくさんの総理大臣が替わってます。

そういう人たちが共同謀議をして一貫した日本の戦争拡大を遂行するなんてありえない。

その方向の主犯、謀議の中心は昭和天皇なんです。

昭和天皇は側近を通じてその政策を実行したと一応バーガミニは書いている。

その（表面の）現象は書いてある。

昭和天皇の背後に存在する勢力についてはバーガミニには分からないんですよ。

だから本当にちゃんと調べて自分は解明した、昭和天皇の時代の日本の歴史の真相を解明したと思ったところが、それにアメリカのためにもすごく大きな仕事をした、みんな褒めてくれるよと思ったところが、たちまち背後から襲われて、なんだか訳のわからないうちに潰されちゃうんですよ。

彼には見えないイルミナティのアジェンダの中に日本が設定され、日本が取り込まれていて、その結果いろんな現象が出て来るってことがバーガミニには分からない。

私は『ユダヤの日本占領計画』という本の中で、日支闘争計画について割と詳しく説明してます。

渡部悌治先生の『ユダヤは日本に何をしたか』という本の中にも日支闘争計画については説明してあります。

日支闘争計画というのは 1918 年の秋、モスクワで全ユダヤ会議の代表とボルシェビキ政権の代表と、イルミナティの代表が集まって日支闘争計画という長期計画を立てた。

それは日本と中国を戦わせる。

日本と中国の全面戦争に持っていく。

その過程で共産主義が中国の中で主導権を取るように持っていく。

そしてその次に日本に対してアメリカとの戦争、英国との戦争、最後に共産ソ連との戦争、に持っていく、そして最終的に中国も日本も同時に我々が支配する、そういう計画を立てたというんですね。

それがロシア語の新聞に載っていたものを日本の諜報機関が手に入れて、東京に報告したけど、その意味が全然わからないままになっていると渡部先生は言ってます。

渡部悌治先生が仰るには、その問題の情報が載っているロシア語の新聞は、1918 年の秋に行われたのですからそのあとなんでしょうね、国会図書館にありますよとおっしゃっていました。

あいにく私はそれを調べてないんですけど、国会図書館にまだ保存されているなら、ロシア語のわかる人が見れば出てくるでしょう。

それで日支闘争計画というのは、ボルシェビキ共産政権、コミンテルン、共産主義の勢力だけじゃなくて、全世界のユダヤ人組織の代表が入ってる。

それからイルミナティの代表が入ってるって説明されています。

日支闘争計画というのは、ソ連共産主義政権の単独のプログラムではない。

全世界のユダヤ人組織、イルミナティの世界組織の計画でもある。

真相に迫ろうとする人は、そのところで止まってしまっているんです。

二・二六事件研究家の山口富永（ひさなが）氏。

国民新聞という右翼の月刊新聞をずっと購読してて、この山口という人の文章を読んだら、面白いことを言ってると思ったんですけど、最近バーガーミ二の本を読んだら、改めてこの人を注目しなくちゃと思ったんです。

平成2年に出版された『二・二六事件の偽史を撃つ』を最近山口さんから送って頂いた。

山口さんは1924年生まれですから、戦争末期軍隊に徴集されたんですね。

少年時代、中学生の頃からでしょうか、真崎甚三郎大将と交流があって手紙のやりとりをして、真崎大将と皇道派の志と方針に全面的に共鳴した人なんです。

たいていの方は少年時代の話はしばらく経つと忘れちゃって、捨てちゃってサヨナラするのが普通ですけど、この人は84歳に至るまで真剣にそのことを追求しています。

2・26事件の真相、全面開示

これは最近、連載されたものです。

皇道派の真崎大将は、日本の国力相応の軍備強化（口先だけの外交は不可）、戦争の拡大は絶対に反対という人ですからね。

真崎大将はイルミナティからすれば、大変邪魔なんです。

無自覚的にイルミナティのエージェントにならされた統制派の人たちは、裕仁の直系の軍人でもあるんですよ。

統制派の最たる者が有名な永田鉄山少将で、相沢中佐に陸軍省の中で惨殺された（1935年）。

永田鉄山がイルミナティの道具として使われた最も代表的な軍人でしょう。

イルミナティにとって真崎は邪魔だから排除しようとした。

二・二六事件を奇貨（きっかけ）にして、二・二六事件の共犯者だと称して（真崎を）逮捕して調べたんですけど、陸軍の司法部、陸軍の軍事裁判は無罪の判決を下したんです。もともと何の関係もないですから。

皇道派の真崎大将は、イルミナティが日本の完全抹殺に向かって決定的に歩を進めようとするときに、日本の陸軍の良識的な部分として、しかも陸軍の軍人から絶大な信頼を得ていた。

そういう人物の排除が、至上命令だったことがよくわかります。

したがって、私は、昭和天皇が二・二六事件の主犯である、日本を滅亡に追い込んだ国賊である、日本の歴史上もっとも顕著なもっとも極悪の国賊である、という風に昭和天皇・裕仁にレッテルを貼り付ける必要があると思います。

そういう風に価値観を変えないとダメです。

明治天皇と昭和天皇は全然異質なんです。

明治天皇は15歳までは、大室寅之祐、普通の日本人ですからね。

傀儡とされたけども、薩長の藩閥の傀儡なんです。

それを通じてイルミナティの傀儡に位置づけられたけど、少年時代は日本人として教育されているから、そう簡単には動かされないんですよ。

西南戦争で、大久保・木戸一派が、とにかく「西郷を殺せ」っていうけど、明治天皇は本

心では絶対反対なんですよ。

大久保と木戸は、明治天皇に、西南戦争の最前線に立って、大本営を広島辺りに持って行って、天皇の威光でとせつついたけれども、明治天皇はそれを拒否して、宮中に籠ったまま外に出てこない。

これは歴史に残ってます。

明治天皇は反対なんですよ。

西南戦争で西郷さんが死んだ後、木戸が途中で病死、大久保は明治11年に殺され、岩倉は明治16年に病死した。

その後、明治天皇は西郷隆盛の名誉を回復しろと命令し、それは実行されたんです。

「西郷隆盛の遺族はどうしてる？」と明治天皇が尋ねて、調べたら、妻子は山中に隠れてひっそりしていたことがわかって、どうこうとなるわけです。

一刻も早く名誉を回復させよと、明治天皇が言うわけです。

次に日清戦争を起こすでしょ。

明治天皇は日清戦争は反対なんです。

しかし、薩長藩閥政権はイルミナティの傀儡だから、明治天皇がなんと言おうとも問題にしないんですよ。

明治天皇の意思に反して、日本は日清戦争に突っ込んだわけですよ。

私が『長州の天皇征伐』という本を書いて出すときに、出版社が「明治天皇国賊論」という案をいつてきたんですが、明治天皇を国賊と言い切るわけにもいかないんですよ。

しかし、昭和天皇は、明々白々、歴然たる日本史上最悪の売国奴です。

日本全土を今に至るまでイルミナティの占領下において、日本はその命令通り日銀の利子をゼロに近づけて十何年やっているんですからね。

そのお金をユダヤ・アメリカ・イルミナティがただ持っていつて盗っていることに、日本の国家は何も言えない。

日本の占領はますます強化されてますよ。

そういう状態にしると言われ、その通りに実行したのが裕仁なんですよ。

裕仁は日本史上最悪の売国奴だと私は考えてます。

裕仁については「国賊・昭和天皇」と言うべき時だと思います。

そういう風に日本人の価値観を変えないとだめです。

明治天皇は違いますよ。

昭和天皇はイルミナティの傀儡として百点満点というわけです。

二・二六でイルミナティの傀儡としての昭和天皇を独裁者としておくことが必要だった。

そうしないと、百戦百敗、完全に惨敗して、日本が滅亡することが決まっているような、中国に対する戦争、中国に対する全面戦争はやがて、松岡洋右が当時言ったように、必ず米国との戦争に日本は引っ張り込まれ、最終的にソ連との戦争となる。

日本は全世界を敵にして、滅亡するしかない。

松岡洋右はそう言ってます。

松岡は外務大臣で、昭和天皇が大嫌いなんです。

裕仁は松岡についてあれこれ悪態をついてます。

日本を全世界に対する無謀な、惨敗して滅亡するしかない状況に持っていくために、裕仁

は使われ、その通りに裕仁は演技したんですよ。

これを売国奴と言わずして何と言うんですか？

二・二六事件は、それを象徴的に表しているんです。

陸軍の将官が全員、決起将校の心情、政策、志をちゃんと評価すべきだと言ったんです。

しかし、昭和天皇はそんなものは問題外だと排除した。

バーガミニはそれを「政治戦に裕仁は勝利した」って言ってるんですけど、その通りです。

日本の蘇生には真崎大将の名誉回復が絶対必要条件二・二六事件についてそう考えると、真崎甚三郎大将の遺志が、今、非常に重要になっている。

日本人が、真崎大将の名誉回復をすることが、滅亡寸前の日本の再生と蘇生のために絶対必要条件だと、私は、山口さんの本を読んで気が付いたんです。

この山口さんが、昭和19年に陸軍に徴集されて入隊する時に、真崎大将を訪問した。

山口さんが、真崎大将に「今、日本に天皇陛下はおられるのですか？」って聞いたそうです。

そしたら真崎大将は「二・二六の将校もそれを嘆いて死んでいった」と言われたと。

昭和19年のことです。

山口さんは皇道派の志に同調してたから、「今の天皇というのはなんだ？」「あれは本物の天皇なのか？」「今は日本に天皇はおられるんですか？」という疑問が出てきたわけですよ。

本当にその通りですよ。

実際、銃殺刑に処せられる青年将校十何名の中には、天皇を公で批判した人もいるし、批判しない人もいるけど、と言ってますね。

山口さんは非常に重要なことにちゃんと迫ってます。

しかし、「裕仁は国賊だ、売国奴だ」とはつきり言い切るのは、日本人にとっては難しいです。

左翼はイルミナティの虎の威を借りて「昭和天皇は戦犯だ」とわめくんです。

彼らはイルミナティの手先ですからね。

イルミナティの虎の威を借りてあれこれ言っているだけのくだらない人達です。

左翼そのものがイルミナティのエージェントとして日本をイルミナティに売る売国奴ですから、こういう人たちは問題外。

日本人の立場として日本民族の立場から見て昭和天皇とは一体なんだ？

そのことに今までで一番接近しているのは、二・二六事件に全然関係ないのに逮捕された皇道派の首領である真崎大将ですね。

真崎大将が「東條ごときはものの数でもないが、自分に対する圧迫が宮中からずっと来た、そのことが一番難しい、苦しいところだった」という趣旨のことを言ったと書いてあります。

宮中ってなんですか？

木戸内大臣は天皇の番頭であって、権力そのものじゃないです。

宮中ってのは昭和天皇でしょ。

しかし真崎大将も昭和天皇に対してストレートにそれを告発する、それを批評することが心理的にできないんですよ。

それを超えることができなければ日本の民族はもう終わりですよ、と私は思います。
つまり、イルミナティは孝明天皇を弑逆させて、その辺りに傀儡を作って、明治天皇はなかなかイルミナティからすれば素直じゃないでしょ。
大正天皇は明治 11 年生まれですから、それを教育する宮中はワンワールドの手先。
完全に支配してるんだからね。
昭和天皇に至っては明治 34 年生まれですから、ワンワールドによる宮中の支配は完璧になってます。
裕仁はイルミナティの純粹培養の作品です。
イルミナティの傀儡として終始し、摂政の時代も、昭和前期も、占領中も、一応講和回復後も、イルミナティの言う通り期待通り百点満点と評価していい存在だった。
そうして日本は敗戦、講和回復しても昭和天皇の言うとおりに、ずっと占領下にあります。
その件について多少真相に迫った学者などが 2～3 名存在します。
その学者の研究によれば、朝鮮戦争が起きて米国政府が日本との講和条約交渉を始める。
その時に吉田茂首相は常識として当たり前だけど、講和が締結すれば戦争は終結だから米軍は全部撤退する、それが当然と思って進めていた。
ところがなんと昭和天皇が吉田首相の頭越しに、吉田首相の知らないところで裏取引、秘密交渉をやるわけですよ。
秘密交渉の相手はダレスです。
ダレスは共和党系だけど、民主党政権でも有力な外交顧問になった。
対日講和条約はダレスが主任となった。
ダレスと言うのは 1920 年代からロックフェラー財団の最有力者で、イルミナティのコンコンチキですよ。
そういう人物と裏取引、直取引して昭和天皇は吉田茂の方針を否定して、講和条約締結後も無期限に日本は米軍に軍事基地を提供する、というよりも米軍に無期限に日本に駐留してもらいたい、と言うわけです。
沖縄に至っては 50 年くらい、事実上半永久的に米国の領土として日本は認める考えがあるということをダレスに対して昭和天皇は言うわけですよ。
これは何なんですか？それを売国奴と言わずして何というんですか？
本人が正式に選んだ吉田茂首相とその内閣、吉田茂は常識として戦争終結したら米軍は日本全土から撤退する、そういう当然の前提のもとに講和交渉を始めたんです。
当たり前のことじゃないですか。
それを昭和天皇が横やりを出して、ダメだというわけです。
率直に言えば、日本は米国に無期限に占領してもらいたいと言うわけです。
これは何なんですか？その結果、今のようになってんですよ。
しかしこれは昭和天皇の日本に対する無数の裏切りの一つに過ぎません。
しかしながら日本人はそのことを公然と報道し、論評し、批評する自由を全く与えられてないんです。
というよりは、日本人がその言論の自由を行使する気力を奪われているんです。
これは日本が刻々急速に滅亡していく、そういう絶対的な心理的条件以外の何ものでもないと思います。

しかしそうなった歴史的背景は何なのか？

そういうことを日本人には真剣に考える必要があります。

天皇＝イルミナティの傀儡、として歴史の再検証を別の話になるんですけど、日本でユダヤ・フリーメーソン批判を最初にやっつてずっと最後まで主要な指導的な役割を果たした、四王天延孝陸軍中将〔1879～1962年〕は、士官学校、陸軍大学を出た日本の陸軍のエリートコースの一人です。

そして第一次世界大戦中フランスに観戦武官として派遣されていたんですね。

そうしているうちにフランス人にいろいろ友人ができて、その友人から「この戦争はお前、ユダヤが始めた、主体はユダヤだということを知っているか？」って言われるんです。

それを聞き逃す人もいるかもしれないけど、四王天さんは真剣に受け止めて研究をはじめたわけなんです。

一体これは何だ？

今は違うでしょうけど、その頃のフランスには非常にたくさんのユダヤ・フリーメーソンに批判的な文書・言論があったんです。

そういうものをたくさん集めて、真剣に研究調査していくわけなんです。

第一次大戦中の観戦武官として派遣されるのは、紛れもない軍のエリートコースですよ。第一次大戦以降日本はシベリア出兵するんですけど、四王天さんは満州の北部に陸軍の諜報機関の事務所を作って、反ボルシェビキ、反共産主義的ロシア人と接触していろいろ情報を得たり工作したりするんです。

そういうことを通じてボルシェビキ共産革命が国際ユダヤによって計画され実行されたという話を聞いて、たくさん情報を集める。

そうして四王天さんは最も早い時期から日本でユダヤ・フリーメーソンに対する批判、思想戦、それに対する対策、そういうものをずっとやっていたわけなんです。

国際連盟ができると、日本はその頃の世界の主要5カ国の一つになるんですね。

その主要5カ国が国際連盟の軍事委員会を作る。

日本の陸軍はその国際連盟の軍事委員会の日本軍の代表として四王天さんを派遣するんですよ、ジュネーブに行きます。

その頃、陸軍少将になってるんじゃないでしょうか。

そういうコースは、軍のエリート・コースですよ。

ところが、ジュネーブから帰任すると、すごく露骨に左遷されるんです。

名古屋師団付といっても特別な仕事は何もない、完全な閑職、クビ寸前の地位に置かれる。それでも、四王天さんは日本全を奔走して、一般の日本人に対して、ユダヤ・フリーメーソンの危険を警告する講演会をたくさんやっているんです。

そしたら、上原勇作元帥がじきじきにやっつてきて、「お前はユダヤ問題なんていうくだらないことはもうやめろ」と言うんだって。

「いや、それはできません」と言ったら、たちまちのうちに四王天さんは、陸軍退役ですよ。

陸軍からクビです。

だから、上原勇作って言う人は何かって思うでしょう。

四王天さんは、昭和16年、大東亜戦争が始まる年に有名な『猶太(ユダヤ)思想及運動』

という本を出したんです。

その本の序文のなかで、四王天さんは、以前はユダヤ問題を自分がやっていくと、上のほうからやめさせる圧力が非常に強かかかってきて、最近はその頃に比べればずいぶん違ってきた、そんなことを書いていますよ。

一番上ってどこかって言ったら、天皇と宮中以外にないですよ。

日本のシステムでは。

落合莞爾(かんじ)さんの話では、上原勇作はフランスに留学中にフリーメーソンに加入している。

上原元帥は明確なワン・ワールド、フリーメーソンだと言っています。

従って、日本では、陸軍・海軍・財界・その他、明治以降の中枢部に、ワン・ワールド、フリーメーソンの指揮系統がずっと機能している、機能していたと見ることができます。

渡部悌治先生は『ユダヤは日本に何をしたか』のなかで、二・二六も背後では、ユダヤ国際資本が操っていたと言っていて、あまり詳述してないですけど、そう言っています。

従って私たちは、地球を支配している、ユダヤ・フリーメーソン・イルミナティといった勢力をちゃんと確認して、明確に意識して、デーヴィッド・アイクは『グローバル・コンスピラシー』という本を出していますが、そういう枠組みのなかで、もう一度日本の歴史を見直す必要があります。

グローバル・コンスピラシーという大きな枠組みのなかで、孝明天皇弑逆と、それ以降イルミナティの傀儡として作られた歴代天皇、こういうものを批判的、客観的、詳細に検証していく精神的・心理的な力が必要です。

今の日本では、天皇をあれこれ批判したりすること自体が絶対禁止されている。

別に法律で禁止されているわけではないけど、自分の内心で押さえつけている。

あるいはイルミナティの有力な御用機関として、右翼と称する反日本的な売国奴集団が暴力で脅迫する、そういうことを通じて、発言・言論を抑えてるんです。

しかし私は、その精神的呪縛を断ち切らないと日本は完全に滅亡していただけたと思います。

「今、日本に天皇はおられるのでしょうか？」

私は山口富永(ひさなが)さんを国民新聞で読んでたんですけど、そういうことに最近気がついて、ちゃんとやることにしようと思って連絡しました。

この本は平成2年に国民出版社から出てもう絶版で、国民出版社には在庫はなくて、山口さんの手元に若干在庫はあるそうですから、私がほぼ全部 50 冊くらい買取ることにしたんです。

だから、是非皆さん読んで頂きたい。

山口さんは、昭和 19 年、軍隊に入るといいう時に、「今日本に天皇はおられるのでしょうか？」っていう大胆な質問を真崎大将にしたというんですから、この人の心はちゃんとしていますよ。

だから六十数年経った現在でも、しっかりした文章を書いておられるんでしょう。

しかしこの人も、世界のイルミナティ・フリーメーソンの陰謀、グローバル・コンスピラシーの存在にはまだ気がついておられないんです。

でも、それは私達がちゃんとやっていく事であって、この人が成し遂げられた仕事は評価

していく必要がある。

それから、真崎大将の名誉を復権することが絶対必要条件だと私は思います。

真崎大将も、昭和天皇がおかしいんじゃないかと内心確信されたんじゃないかというふうに推測するんです。

しかし、それを言葉に出して言うことは出来ないんですよ。

だから、東條ごときは、せいぜい少将どまりの馬車引きくらいが適当な男で、問題視しない。

しかし「宮中」が問題なんです。

「宮中」とは裕仁のこと。

それを何とかしないと、日本はどうにもならないんじゃないか？

ということを真崎大将ははっきり認識していたと私は思います。

山口さんが昭和 19 年に軍隊に入る時に「今日本に天皇はおられるのでしょうか？」と聞くって事は、天皇はいないんじゃないかという気持ちがないと、そういう質問は出てこない。

いや、昭和天皇と称する者はいったい何だ？となるでしょう。

内心、心の奥にはそういう失望があるわけですよ。

そういう必然的な思考の過程、行動の過程として、私がそろそろ問題を前面に押し出さなければならぬと思っています。

二・二六事件については、完全に真相が隠蔽されているのみならず、Disinformation（偽情報）が日本人に徹底的に刷り込まれてます。

それを転覆するには我々の価値観を変える必要があります。

真崎大将の名誉回復は、とっかかりとして重要であり、意味があると思います。

鳥居民という人の本を、まともに読んだことがないけど、この本はざっと読んだ。

そしたら木戸幸一を一所懸命叩いてるわけですよ。

今更木戸幸一をぶっ叩いてどうなるんですか？

東京裁判で終身刑、その後釈放されて昭和天皇に即優遇されて頭をなでられた木戸幸一を叩いても何も生まれません。

この人はすごく臆病な人ですよ。

臆病というのが今の日本民族にとって一番危険な心理なんですよ。

臆病を克服しないと日本はもう生き延びる事も蘇生することも出来ません。

臆病、恐怖を超えるってことをデーヴィッド・アイクは一所懸命言ってます。

李洪志の法輪功でも言ってますね。

恐怖を超えるには大変高い心理的、精神的次元が要求されます。

恐怖を超えるということの意味は中々一筋縄ではないですね。

その話はまた別にしましょう。

私は二・二六事件について、初めて本格的に、日本人が真相に迫る動きを始めないとはいけません。

私の話を一応終わりにして、皆さんの質問を紙に書いて頂いても口頭でもいいですけど、ちょっと休憩して質問を受けます。

何枚か重要な文章のコピーを配りましたので、よくお読みください。

近衛上奏文を無視した裕仁それでは私の話を続けますね。

日本の国家の中枢部は天皇ですね。

中枢に一番近いのは近衛公爵と木戸幸一内大臣。

そして木戸と近衛の対立については少し言われてることがありますけど、この鳥居さんの本で比較的詳しく説明されている。

しかし鳥居さんの著述家としての立場は大変臆病で、私はあまり感心しないです。

山口富永さんが国民新聞の一面欄に連載物語でいろいろ書いている。

昭和 19 年（20 年の誤り）の初め、有名な「近衛上奏文」というのがあるでしょう。

近衛文麿が昭和天皇に対して上奏文を提出したって言うんです。

その上奏文の筆者は岩淵辰雄という政治評論家だと山口さんは言っています。

岩淵辰雄って名前、聞いたことありませんか？

この人は戦前、戦時中、戦争後しばらくの間、非常に活躍した重要な政治評論家です。

岩淵さんは、真崎大将、皇道派に近い立場の評論家なんです。

それで、近衛文麿が昭和 20 年の初めに昭和天皇に提出した上奏文の作者は岩淵辰雄であると言ってます。

岩淵辰雄は近衛さんを中心にして終戦工作をやったと言うんです。

終戦工作とは、単なる評論活動ではなく、岩淵さんと近衛公爵を中心とするグループは、昭和天皇を説得して真崎大将を陸軍大臣にする考えだった。

小畑敏四郎というのは皇道派で、退けられていた人です。

陸軍中将で予備役になったのではないのでしょうか。

その小畑敏四郎中将を参謀総長、そして近衛さんを首相って訳です。

そういう体制で日本の国策を完全に一変させる方針を立てたと山口さんは説明してます。

もしもそういう構想が実現した場合には、真崎大将は皇道派の総帥として中国との全面戦争にも米英の戦争にも絶対反対の立場ですから、なすべきじゃない戦争を実行した陸海軍（特に陸軍）の主要な指導者ら戦争責任者を何百人も一斉に逮捕して裁判にかけて、日本の国策・外交方針を完全に一変する、そして中国から撤退して米英と講和交渉する、という方針を立てていたと書いてます。

その一環として岩淵辰雄が書いた近衛さんの上奏文を天皇に提出したけれど、天皇はぜんぜん相手にしない。

そして東條内閣、憲兵隊の操作を通じて、そうした謀略をした連中を一斉に逮捕する。

その逮捕した中に吉田茂も入ってたんじゃないですか。

で、この構想は実現しなかったと言ってます。

これは東條がどうこうという話ではないです。

首謀者は昭和天皇ですから。

昭和天皇に上奏文を出してもお話にならないです。

だけど、何もしないでいる訳にはいかないから、そういう計画を立てて動いたということでしょう。

しかし、その計画にとって決定的な障害物は昭和天皇自身ですから、それは無意味です。

近衛上奏文はその時点で東條政権の憲兵隊を通じて弾圧して、近衛上奏文そのものが見えないように、無いことにされてしまったんじゃないですか。

だから日本人は未だに近衛公爵の工作とか背景とか、その構想とか上奏文そのものとか、普通の日本人は知りません。

近衛上奏文という言葉はチラッと目についた人もいるかもしれませんが、普通の日本人は今何も知りません。

しかしそういう事が万が一実現され、真崎陸軍大臣という政権が実現されたとしたら・・・

小畑敏四郎という人は色々因縁があるんですよ。

バーガミニは、1920年（大正9年）、ドイツのバーデンバーデンという温泉地でヨーロッパ在勤の陸軍の少佐クラスの将校が集まって国家改造計画を立てたという訳です。

有名な話です。

その中心人物は永田鉄山（当時は少佐）。

小畑敏四郎は、そのバーデンバーデンの三羽鳥（永田と小畑ともう一人）の一人です。

小畑敏四郎のほうは、昭和になるにつれて、中国に対する戦争、中国全土を占領してさらに南進するという基本的な国策に反対の立場だった。

だから永田鉄山、東條とは反対の立場だった。

したがって、昭和10年前後、小畑敏四郎は中将で退けられて失脚、というか排除された訳です。

それで小畑敏四郎を参謀総長っていう話が出てくる。

そういう体制だったら、真崎大將が、統制派、日本を中国、全世界との戦争に引きずり込んだ主要な責任者を全員逮捕して裁判にかけ、一掃するだろうと書いてあります。

そうして日本が国家体制・基本政策・国策・外交政策・戦争政策を完全に一変する、そして中国から全面撤兵して蒋介石と講和することを目標に立てた訳です。

そうなると、戦争を実行してきた東條たち統制派の軍人にとっては自滅ですから、絶対に抵抗して排除する、芽を摘むという行動をとるでしょう。

東條の憲兵隊は当時はちゃんと生きて働いているから忽ち摘発されて潰された訳です。

……「軍部に操られた平和主義者の天皇」というイメージ作り……

しかし、昭和天皇とその側近はそれとは全く別な形で米英との平和交渉に入っていく。

そのやり方については鬼塚さんが『日本の一番醜い日』という本の中で詳しく書いてます。

つまり昭和20年8月15日、昭和天皇はラジオ放送で「敗戦」といった放送をする。

その時にまったく偽装の対天皇、対日本政府のクーデタを演出して、危ないところで昭和天皇の放送が実現したという話を作っているけど、それは裕仁と、三笠宮が主たる助手になって、でっち上げた話。

そのクーデタによって、昭和天皇は、昭和初年来の戦争また戦争、全世界を敵にして日本が全滅する戦争を推進した軍国主義者の姿から、平和と民主主義の人、連合国の忠実なエージェントへと、一夜の内に変身する。

そうした目的の偽のクーデタを実現し、連合国とは裏取引をして、昭和天皇は戦争犯罪から免責されて、占領軍の協力者として温存・保護される、という具合にひょいと変わる事を目的とした偽のクーデタを実行する訳です。

それが裕仁のやり方です。

裕仁は、皇道派を復権させると自分の身に火の粉が降りかかる、自分の身すらやばい可能

性が大であるし、名誉も何もおかしくなるから、東條を使って完全に消した。
近衛さんを中心とする皇道派を復権させて日本が全面的に戦争を停止し、中国から自発的に撤兵して蒋介石政権と講和して、という方向に転換するのを阻止した訳です。
もしも近衛・真崎のラインで日本が方向転換すれば、敗戦後の日本は今のような状況にはなっていない事は確実です。
すべてを失い、民族の魂を失い、どんどん墮落して滅亡に転落していく方向になっていないですよ。
しかし裕仁はそこでも明確に日本民族を裏切ったんですよ。
日本民族をイルミナティに売り渡した。
売り渡した事によって裕仁と一族の身の安全を担保し、保障してもらった訳です。
こうして裕仁と一族は日本を裏切って裏切り続けている。
その裏切りが日本民族によって完全に暴露され裁かれぬ限り、決着がつかぬ限り、日本民族はイルミナティの、天皇という傀儡を使った精神的呪縛に掛けられたまま、まあ、死んでいくしかないですね。
今でも日本は精神的にはンビ人間です。
日本民族は自分の精神を失ってますからね。
近衛さんの動きが実現されればそうはなってないでしょう。
近衛さんが最後のところで日本の貴族の根性、やる気、勇気を表明しようとした事は評価できるんじゃないですか。
鳥居民という人の本は、私が申し上げたレベルから見ると低い次元で現象をあれこれ言ってるだけです。
その程度の話でも、今の日本人につき込まれている戦争と敗戦のプロセスに関するデマ情報と比べれば遥かにマシでしょう。
近衛さんが皇道派寄りだったこと、皇道派に同情・同調的だったことは、歴史資料にも少し出てきますよ。
それをさらに突き詰めて研究する、考える、そういう事は全くなされてない。
なされてないというか、それを突き詰めるとただちに裕仁が標的になりますから、その遙か手前で止まってしまうんです。
それを先へ進めないといけないんですよ、私達は。
そのために私達に手がかりとして与えられているのは「真崎大将」なんです。
皇道派の荒木貞夫がワンワールドのエージェント？
話は一層複雑に田崎末松という人の真崎大将の評伝はかなりマシです。
皇道派でも荒木大将っているでしょ。
荒木大将は皇道派の NO.1、代表と当時言われていた。
ところが荒木大将というのは、大変危なっかしいというか、奇妙というか、いかがわしい存在なんですよ。
この人はずっと陸軍大臣をやってて、二・二六後も処罰されることもなく、昭和天皇に追放されることもなく、戦時中大臣をやった事もあるんじゃないでしょうか。
私は荒木大将とは非常に奇妙な人物だけど、何だろうと思ったんです。
落合莞爾の「ニューリーダー」の連載を読むと、この人が上原勇作元帥の後継者に指名さ

れたとあるんですよ。

これは非常に奇妙です。

上原勇作はれっきとしたフリーメイソン、ワンワールドのエージェントですよ、日本の軍の中で。

単なる薩摩派閥でもないです。

そうして上原元帥は全く目に見えない秘密の特殊工作をやったということですが、その後継者に荒木大将が任命されたというのはとても奇妙に思えるでしょ。

彼が皇道派というのは辻褃が合いません。

上原勇作の後継者という事は荒木大将もワンワールドの紐がついてる事を意味します。

真崎大将にはそういう事が全くない。

山口さんの国民新聞の連載の中で、戦時中に英国のスパイとして逮捕され、ビルから投身自殺したコックスという人がいます。

そのコックスを警察が取り調べたときの話が色々あるみたいですけど、そのコックスという英国のスパイが自供して、「われわれは日本の陸軍の主要な指導者、軍人を全て接近・工作して取り込んだ」と言うんです。

しかし、「真崎大将だけは、全く取り付く島がない、工作する事が出来なかった」と供述したという。

幕末から明治初年、フリーメイソンが薩長の維新政権の主要人物を全部取り込んで何らかの形で紐をつけたけど、西郷隆盛だけは頑としてフリーメイソンの誘いにも工作にも応じなかった。

それでフリーメイソンは西郷隆盛の排除を指示したという事が「月刊ユダヤ研究」に載ってます。

そのことを想起しましたね。

真崎大将という人は、現代日本において本当に重要な人物なんです。

「わからない奴はわからないんだ。

ほっとけ」非常に重要な日本民族の指導者であり、指導者たるべきところを排除された真崎大将について、山口さんが言うには、二・二六事件の前から、敗戦後、現在に至るまで、一貫して真崎大将についての偽情報、誹謗中傷、全くの嘘の情報、デマ情報がまかり通っている。

その偽情報を振りまいてる主要人物、ジャーナリストの代表格が、半藤一利とか、ハタ何とか（秦郁彦）とか、年中マスコミに出てくる、昭和史についてくだらない話、偽情報を振りまいてる作家ですよ。

体制側で持て囃されてる人達。

こういう人達を通じて、真崎大将と皇道派についての偽情報をばら撒いてる主要勢力は、左翼だと言ってます。

左翼ということは朝日新聞と岩波書店ですね。

こういう連中はなぜ皇道派の悪口を言わなければならないのか？

大変興味のあるところですよ。

なぜ左翼、岩波・朝日は、皇道派の悪口を言うの？

全くの嘘八百を並べ立てて、皇道派・真崎大将を貶めてどうしよう？

どういう理由でそういう事をするんですか？

それは大きな事なんですよ。

左翼は決して信用してはなりません。

もっともらしい事を言っても、左翼はイルミナティの紐付きですからね。

心を許してはいけませんよ、左翼には。

リベラル派もね。

山口さんは、少年時代から真崎大将が亡くなるまで親しく交流して、真崎大将の死後も孤軍奮闘して皇道派の旗印を守ってる訳です。

こういう人がいるとは本当に改めて見直しました。

それで戦後ずっと皇道派が正しかったと伝えようと、活動し続けてる訳です。

そしたら、真崎大将に「おまえ、もうわからない奴はわからないんだ。

ほっとけ」「もういいよ」「いい加減にもういいんじゃないか」って言われた。

「その内、時代が皇道派（我々）の正しさを発見するだろうから」と何度も言われたと書いてあります。

しかし、体制側・権力側が垂れ流してる情報以外全く存在しないとすれば、日本人は皆それに洗脳され、何となくそんなもんかという気になります。

私も（今まで知らずにいて）ずいぶん恥かしい話だと反省してます。

本物の情報がなければ、日本人は洗脳されっぱなしですよ。

今、日本は土壇場に追い詰められ、精神的に腐敗が進行してますから、それが一番危険で致命的ですよ。

それで、私達は再生・蘇生する方法を見つけなければいけません、まずは皇道派・真崎大将のことを日本人が真剣に見直して、名誉回復の動きを起こすことです。

真崎大将の名誉回復ということは、裕仁を告発することになります。

ここに山口さんが書いている真崎大将の言葉がある。

「東條ごときは物の数でないけど、しかし自分を弾圧する根源が宮中から来た。

その事が一番自分にとっては苦しい事であった」と。

宮中ってなんですか？

裕仁ですよ。

昭和天皇によって真崎大将はキュウキュウに追い詰められ弾圧される。

二・二六と関係ないのに、寺内陸軍大臣は真崎大将を逮捕する。

陸軍大臣が陸軍の軍事裁判の委員長だから、陸軍大臣が決定する訳です。

寺内陸軍大臣は、青年将校と北一輝の裁判をする前に、判事団（軍事裁判の裁判官、軍人）に判決書を渡してる。

判決は有罪で死刑です。

事前に死刑の判決を出せと陸軍大臣（軍事裁判の長）の名で紙を配っていた。

出来るだけ判決は重く執行は早くとの基本方針を陸軍大臣が与えて、二ヶ月の暗黒裁判で死刑判決、直ちに死刑執行。

その後、真崎大将を逮捕。

そういう命令を受けていたにも関わらず、裁判官も検察官も（検察官と裁判官は一人二役です）、真崎大将を有罪とする何の証拠もない。

寺内陸軍大臣は、真崎は銃殺刑だ、死刑だと大声で喚き立てたそうだ。
それでも裁判官・検察官は、「いくら何でも全く関係のない真崎大将を死刑判決には出来ない」という訳で無罪釈放にした。
寺内陸軍大臣の方針は裕仁の意思でもありますからね。
裕仁は全く無実の真崎大将を殺せて言った訳です。
そこで裁判長・検察官のホサカ〔為清註：軍法会議で首席検察官をつとめた匂坂（サキサカ）春平？〕という人は、言われた通り 17 名、青年将校、北一輝、西田税に死刑の判決を下して、その事に死ぬまで鬱々と苦悩してる。
敗戦後は自宅に籠ったきりで、比較的早く死んだと言われてます。
この検察官が最高責任者でしょう。
しかしそれをやらせたのは誰ですか？ 裕仁以外の何者でもない。
裕仁は何の為にそうしたんですか？
イルミナティの命令を実行したんですよ、裕仁は。
そうして二・二六の時に日本の運命が決定されたんです。
陸軍の将官の絶対多数は、決起将校の趣旨は酌むべきものがあり、統制派と裕仁が強行するような中国との全面戦争は絶対してはならないという気持ちだった。
日本の軍事専門家は自分たちの軍事力の限界をよく知ってますよ。
そういう日本の軍事的・経済的力で、中国全土を占領なんて、どんな戦争をするんだ？
自分達の責任上、対賛成できないと思った訳です。
日本の国民もそうです。
今の様に選挙で投票したら、そんな事に賛成する国民はただの一人もいないですよ。
政治家にも。
にもかかわらず裕仁は、日本に絶対独裁制を敷き、イルミナティの指揮通り、日本を必敗、百戦百敗、必ず壊滅する戦争へと、日本が滅びる方向に引きずり込んでいったのです。
これが日本に対する売国奴でなくて、日本民族に対する裏切りでなくて、何なんですか？
二・二六の時に決定的に転換させられたんです。
その頃、日本人の絶対多数、日本の権力層の軍人も、そんな事はしてはならない、出来ないという良識・常識があったんです。
当時の日本の国家権力の最も強い力は陸軍が握っていたでしょう。
陸軍の絶対多数もそういう考えです。
良識の代表は真崎大将です。
そういう者を排除して、裕仁はいったい何をしたんですか、日本民族に対して。
日本民族に対する裏切りと言わずして、何と言えるんでしょうか？
裕仁と称する人物は日本人ではない。
天皇を詐称するイルミナティの傀儡です。
イルミナティは、日本という国は彼らにとって最も危険な、致命的・驚異的な存在となるであろうから、絶対抹殺しなければならないと、ザビエルが来た時に既に決定してる。
彼らイルミナティのアジェンダ通り、450余年、日本は攻撃され侵略戦争を仕掛けられているんですよ。
その侵略戦争の傀儡、道具として、裕仁は百点満点を与えられた存在なんです。

そしてその事が、二・二六事件の全経過を通じて完全に暴露された。

真崎大将もついでに死刑にしようとしたが、陸軍内部の良識が幾らなんでも出来ないとい
って無罪釈放にした。

その後も真崎大将は完全に干されて監視されることになった。

近衛文麿が皇道派を復活させ、真崎を陸軍大臣にして、日本の国策を完全に一変し、統制
派・裕仁がずっと追求してきた政策を否定してやり直す、一変する方針を立てようとした
ら、裕仁は拒否・否定した訳です。

最近になって私がバーガミニの本を読み始めたのは、鬼塚さんの『日本の一番醜い日』を
読んでる内に、あれはあの通りだろうけど、それで全てという事でもないしと思ったから
で、この半年ほどいろいろ考えて、次第に物事が見えてきました。

今日はいろいろ話しましたが、参考文献や私の話などを参考にして、日本人として、今、
何をすべきか、それを真剣に考えて頂ければありがたいと思います。